日時：2018年2月24日（土）12：45-16：30（開場 12:00）
会場：コラッセふくしま 4F 多目的ホール（福島県福島市三河南町1番20号）

## プログラム

### 第一部 ふくしま“みち”さがしトークセッション
現地を巡り感じた気づきを共有します。

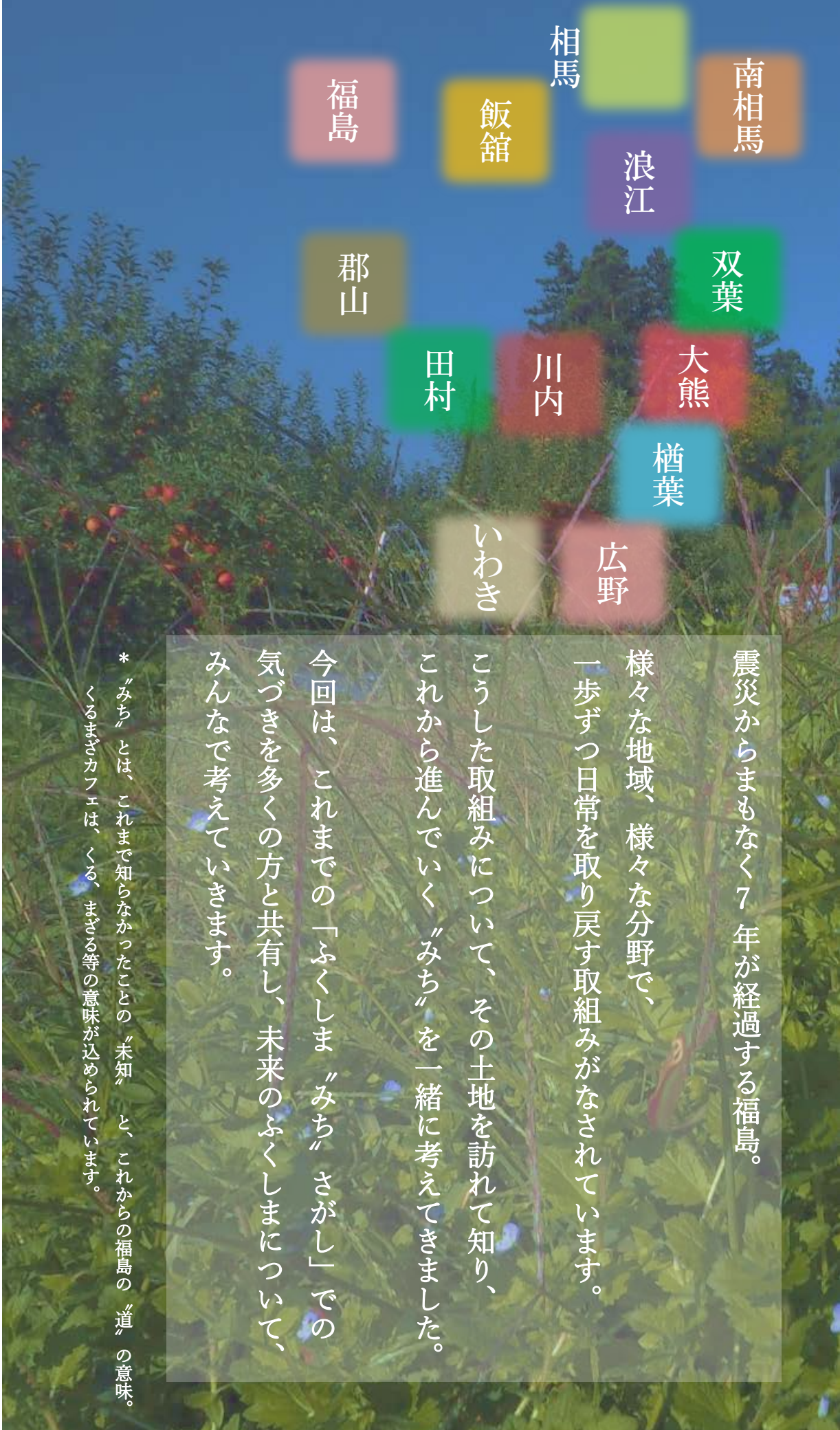
①ふくしまの果樹・森・里・海の今を知る
②日本で最も美しい村「飯舘」を訪ねる
③除染後、仮置場、中間貯蔵の今を知る

### 第二部 ワークショップ
5つのテーマに分かれふくしまのこれからを考えます。

①浜通りの“くらし”と“しごと”
②あぶくまの森林里山の“くらし”
③ふくしまの伝え方、伝わり方
④シニア世代のチャレンジ～飯舘、次世代へのバトン～
⑤除染のその後～仮置場、中間貯蔵～

# ふくしま〝みち〟さがし

# みちさがしで見たこと、聞いたこと、感じたこと。



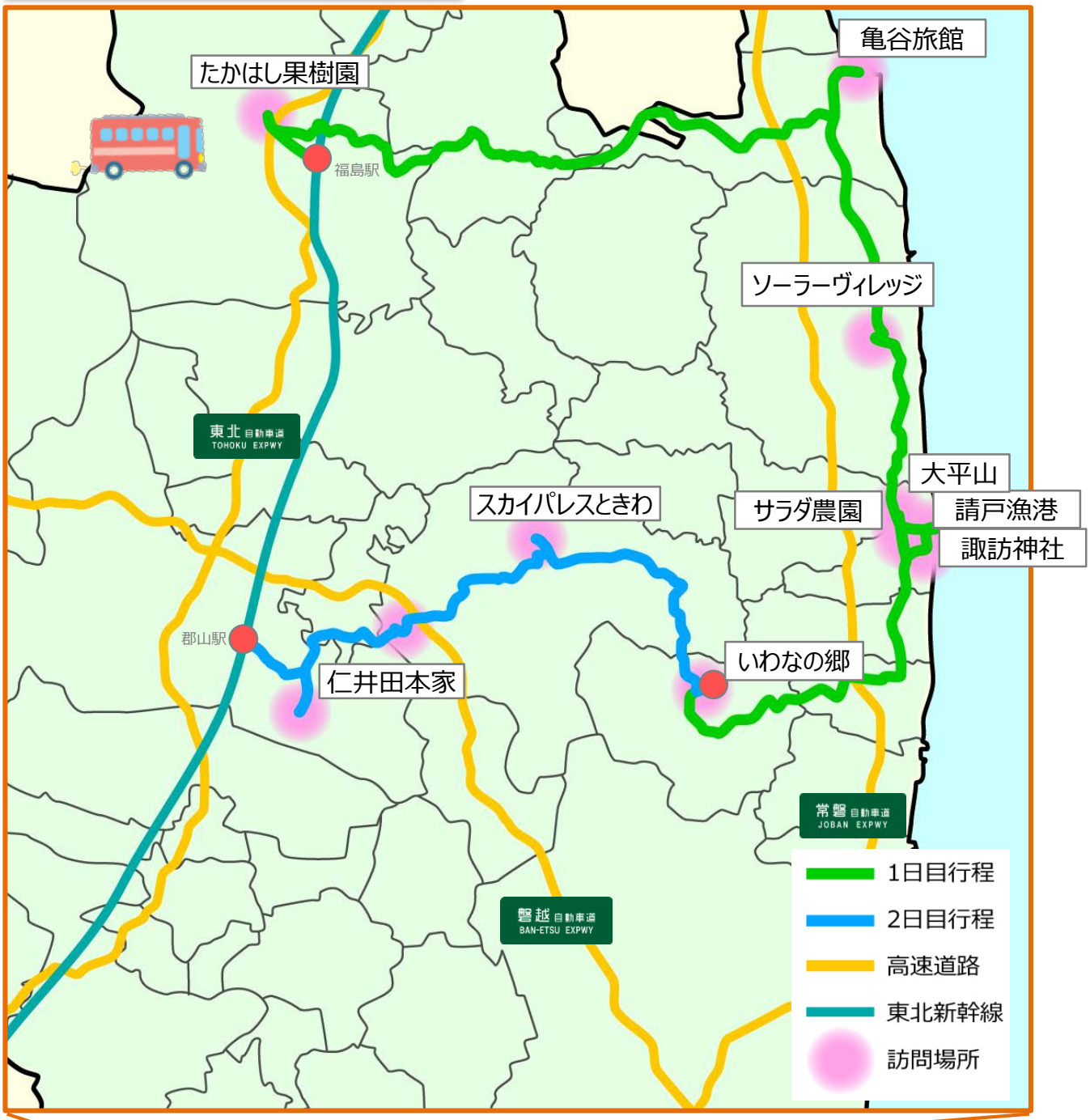

震災からまもなく7年が経過する福島。
様々な地域、様々な分野で、
一歩ずつ日常を取り戻す取組みがなされています。
こうした取組みについて、その土地を訪れて知り、
これから進んでいく〝みち〟を一緒に考えてきました。
今回は、これまでの「ふくしま〝みち〟さがし」での
気づきを多くの方と共有し、未来のふくしまについて、
みんなで考えていきます。

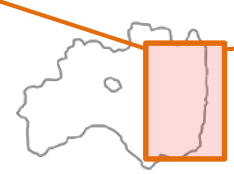
＊〝みち〟とは、これまで知らなかったことの〝未知〟と、これからの福島の〝道〟の意味。
くるまざカフェは、くる、まざる等の意味が込められています。

1 泊 2 日

# ふくしまの果樹・森・里・海の今を知る

- 実施日：平成29年11月3日（金）～4日（土）
- 参加者：21名＋ナビゲーター・越智小枝さん



下は3歳から上は84歳、南は沖縄まで。
参加してくださった皆さまに感謝いたします。
様々な人との出逢いに、
また学ばせていただく経験でした。
越智 小枝

# 福島市
# たかはし果樹園

## 地域にかける想い

震災前からネット販売、贈答用の宅配、カタログ販売、もぎ取り体験など観光と組み合わせた果樹経営を行い、栽培だけでなく販売も力を入れてきました。

震災後、主力商品の「あかつき」の値段は7分の1まで下がり、贈答用の注文も半減しました。とにかく自分たちでやれることをやってみようと始めたのが「土壌クラブ」です。風評被害の払拭、モニタリング調査、大学との協力、生協との協力などを続けてきました。

福島が好きだから。

風評被害がある中、私たち農業者は生産意欲を無くしてはいません。考えられる最善の対策をし、精一杯果物栽培に取組んでいます。

たかはし果樹園
**高橋 賢一さん**

## 参加者の声。
*Guest's Voice*

震災後、どんな気持ちで、どんな活動をしてきたのかを改めて伺い、こうして目の前でたわわにリンゴが実っていることに感謝の気持ちでいっぱいになりました。（福島市４０代女性）

高橋さんのお話し、一言一言から、果物づくりに対する誇りを感じました。本来の姿を見せることが食育という言葉が印象に残りました。ありのままの姿を見せることが大切なのですね。（福島市２０代男性）

将来に希望を持って、地域のリーダーとして活躍される姿に感動しました！（福島市７０代男性）

風評に立ち向かう姿に共感しました。農家さんにとってもモチベーションがいかに大事か、前に進む力になるかということ。これからのブランド作りにも期待します。（福島市５０代女性）

# 相馬市
# 松川浦・亀屋旅館

## 地域にかける想い

松川浦は、太平洋と砂洲によって隔たれた大きな潟湖（湾）です。県立自然公園に指定され風光明媚な名所でしたが、東日本大震災の津波により甚大な被害を受けました。

現在の松川浦は、津波被害が嘘だったような平和な光景ですが、本格的な漁業は再開されていません。「試験操業」が続いていています。一方で、モニタリング検査の結果で安全が確認され、試験操業の対象種が増えています。

私たち地元の若手たちは、震災前の松川浦に戻すためだけの復興（復旧）ではなく、地域の観光を前よりも盛んにしたいと思って、みんなでアイディアを出しあって、実現に向けた議論をしています。

亀屋旅館
**久田 浩之さん**

## 参加者の声。
*Guest's Voice*

衝撃的な津波の映像を見せていただき、漁業の現状をお聞きました。震災前の松川浦では、築地市場の魚の値を決めたほど大量に魚がとれていたそうです。海苔の産地としても有名で、うれしいことに今年海苔の生産が再開したそうです。
（福島市５０代女性）

あの日、ここに津波が押し寄せたんですね。数々の困難を乗り越え、少しづつ前に向かっていること。漁業や観光業など、マイナスからのスタートですが、希望を失わない方々がいる。風化しないためにも、県内の方にもぜひ訪れて欲しい場所です。
（横浜市６０代男性）

震災後の厳しい経営環境の中、たくましく困難に挑戦する姿に拍手を送り、目標実現されることを心より祈っています。
（福島市７０代男性）

# 南相馬市 ソーラーヴィレッジ

## 地域にかける想い

えこえね南相馬研究機構としてソーラーシェアリングで、地元で活動している人たちと一緒に農業再生を目指してきました。

地産地消に繋がるように風力、水力、バイオマス、バイオガス、様々な再生エネルギーを学び、実践していく事を目標に活動しています。

不安を解消し、安心できる環境を整え、もう一度農業にチャレンジでき、地域がしっかり再生して、将来の希望に繋がっていくことが大切だと考えています。

震災から復興した町、県として、住んでいる人みんなの自信に繋がっていけたら最高だなと思っています。

（一社）南相馬除染研究所
（一社）えこえね南相馬研究機構
理事長
**高橋 荘平さん**

## 参加者の声。
*Guest's Voice*

半農半電という考え方が画期的だと思いました。「全てのエネルギーが自然でまかなえれば」という大きな夢をお聞きして、自分も大きな夢を叶えたいと思いました。（福島市２０代男性）

農業をすることも規制された土地で、次世代のために何ができるのかを考え、実践している姿に、南相馬の希望を見ました。（福島市４０代女性）

農作を続けながら、長期の視点からソーラーエネルギーを利用する姿勢に感銘を受けました。短期の利益を追求するのではなく、自分の生まれ育った風土に一生をかける決意がなければできないことだと思います。（東京都８０代男性）

取り組みの新しさを感じるとともに、今後の課題（農作物の販路など）もたくさんあるのではないかと感じました。（埼玉県６０代男性）

# 浪江町 請戸漁港

## 地域にかける想い

東京電力福島第一原子力発電所から浪江町までの距離は、最も近いところで約４キロです。２０１７年３月末に避難指示が一部解除され、居住人口は３８１人、世帯数２６７世帯です(平成２９年９月末時点)。元の約２％の人口しか帰還していないことになります。

町としては「先人から受け継ぎ、次世代へ引き継ぐ〝ふるさと〟なみえを再生する」「被災経験からの災害対策と復興の取組を世界や次世代に生かす」「どこに住んでいても、すべての町民の暮らしを再建する」といった復興の基本方針を掲げ、実現に向けて尽力しています。

浪江町役場　農林水産係
**鈴木 智和さん**

## 参加者の声。
*Guest's Voice*

全ての住宅が流出した風景にただただ唖然とするばかりで、以前の活気溢れた町になることを祈りました。（福島市７０代男性）

２年前に訪れた請戸漁港と大分変っていることに驚き、漁港が再スタートしている今を感じました。ただ廃墟がぽつりぽつりと残されている風景は変わらずそのままで、なんとも言えない気持ちになりました。（福島市５０代女性）

まだまだ復興中であることを改めて感じました。一見、普通の農地に見えるところでも、１０～２０㎝土の下にはまだまだガレキが埋まっていると知って驚きました。（東京都３０代女性）

復興と復旧は別もの。壊れたものが元に戻ればすべてが元通りになるものではない。浪江地区はこれからが復興のスタートだということをつくづく考えさせられました。（福島市５０代女性）

# 浪江町／双葉町
## 大平山と諏訪神社

東北地方太平洋沖地震により発生した津波は、双葉町で16.5メートル、浪江町で15メートルの高さに達しました。

浸水した双葉町中野地区、郡山地区、浪江町請戸地区、中浜地区、両竹（もろたけ）地区、棚塩地区では、津波によりほぼすべての建物が全壊、多くの死者・行方不明者が出る被害をもたらしました。

一方で、浪江町の被災者の約6割を占める請戸地区では、請戸小学校に在校していた児童、職員全員が大平山へ避難。両竹地区では住民が高台にある諏訪神社の境内へ避難しました。

**大平山**

海を一望するこの場所で2015年3月「浪江町営大平山霊園」が完成。
浪江町請戸地区で東日本大震災の津波で流失した沿岸部400世帯分の墓地がこの霊園に納められ、お墓参りができるようになった。

左写真：犠牲になられた方の鎮魂と街の復興、後世への震災の訓戒のために建立された慰霊碑（2017年3月11日）

**諏訪神社**

海から約１キロ。地域住民５０人近くが避難し、火を焚きながら一夜を過ごした。神社のある両竹地区には、双葉町指定文化財の磨崖仏（まがいぶつ。岩盤に掘られた仏像）をはじめ、中世の城郭である両竹館址、両竹の七不思議、安産の仏様・旭観音、高僧の墓地など、数多くの歴史と文化が遺されている。

## 参加者の声。
*Guest's Voice*

請戸小学校の子ども達が全員避難できたことをお聞きし、悲しい出来事の中でも心が救われました。津波が襲った場所で、その土地の様子を実際に見ながらお話を伺うことで、津波の怖さを改めて強く感じました。
（千葉県５０代女性）

６年半たってもまだ震災の爪痕がそのまま残っている諏訪神社に大きな衝撃を受けました。この衝撃を見直す、誰かが何かをしなければならないと非常に重く感じました。（福島市２０代男性）

復興が進み、明るい話、未来の話をすることが多くなり、それはとても喜ばしいことではあるが、一方で決して忘れてはいけないこともある。生きたくても、生きられなかった人もいる。そう改めて考えさせられた訪問でした。
（福島市２０代男性）

# 浪江町
## サラダ農園

## 地域にかける想い

浪江町で、障害者や高齢者の方たちとともに、農業を通じてご縁を広げています。

避難生活の時間が経つにつれ、あれほど戻りたがっていた高齢者から「浪江町には戻らない。戻れない」という声が聞かれるようになってしまいました。しかし、どちらが正しいかではなく、それはそれでいいと思っています。

新たな地域で暮らし始めた人たちも交えて、「支え合いづくり」「地域づくり」をしていきながら、20年後、30年後「高齢者や障害者が浪江町の復興を担った」と誇りをもって言えるように生きていきたいと思っています。

特定非営利活動法人Ｊｉｎ
代表
**川村 博さん**

## 参加者の声。
*Guest's Voice*

全ての取り組みが地域に必要だと思うことを一つ一つ積み重ねた結果だということ。ぶれることなく進んでいることがお話から伝わってきました。たくさんの元気をいただきました。
（福島市４０代女性）

暗いニュース、環境の中でたくましく生きる姿を見せていただき、自分の人生、生き方を改めて見直すことができました。
（福島市７０代男性）

川村さんのポジティブな発想が大ピンチをチャンスに変えたという印象を持ちました。専門家ではない素人だからこそ出来たというお話がとても興味深かったです。
（埼玉県６０代男性）

高齢者や障害を抱える方にも仕事として物事に取り組んでもらうやり方は、今後日本中に拡まっていくように思いました。本人も周りも地域にも、皆一人ひとりが幸せを生み出す大きな力なんだと感じました。（千葉県５０代女性）

# 川内村
## いわなの郷

## 地域にかける想い

震災後、被災地を巡っていた時に川内村のことを知り、その美しい自然に魅了され移住しました。川内村は、８０年前には炭の生産量が日本一で、村のあちこちに炭焼きの　煙がたなびき、自然と調和した美しい景観を作っていたそうです。

美しい自然は、やはり何ごとにも代え難い財産。そこに「炭焼き」という魅力が復活すれば、産業としてだけでなく観光資源としても活用できると考えています。

いわなの郷
**関 孝男さん**

## 参加者の声。
*Guest's Voice*

地元愛が強く、辛かったであろうことも笑って話す。そして未来を見据えて輝いている方が浜通りには本当に多いと思いました。関さんなら、成し遂げられるのではないかと感じました。（福島市２０代女性）

新たに炭焼きをやってみようとする姿勢がとてもすごいこと。自然、そして川内村への強い思いが伝わってきました。（東京都２０代女性）

大切なものの残し方。価値ある取り組み（炭焼き）を残そうとする人が何より重要だと思いました。（いわき市３０代男性）

そこにあるものが当たり前で、それも守りながらも楽しんでいるように感じました。素敵な場所なので、多くの人が集まり活性化して欲しい思いですが、一方でファンが密かに楽しめる場所であって欲しい気持ちも。（福島市５０代女性）

森林資源の豊かさを利用していくために何が良いのか。都市部以外の日本中が抱えている問題を一緒に考えていけたらと思います。（千葉市５０代女性）

# 田村市
# スカイパレスときわ

## 地域にかける想い

岩手県の森林組合に勤務していましたが、震災を機に福島県田村市に引越し、森林組合に勤務しながら、多くの人に自然に親しんでもらうためツリークライミング体験会を行っています。

阿武隈の山は、人と共に生きてきた歴史があります。山の奥深くまで人の手が適切に入っていて、命がとても豊かな森です。私はよそから移住してきたからこそ、地元の人も気づかない魅力が良くわかるんです。

森は、自然の宝物であり、良い森から水も土も海へと繋がっている。森が豊かであれば、川も海も大地も健康でいられるんです。

ふくしま中央森林組合･都路事務所
ツリークライミング®ジャパン
公認ファシリテーター
**久保 優司さん**

## 参加者の声。
*Guest's Voice*

阿武隈山系の希少性について、新しい気づきがありました。普段気づかない森の生態系に関する学びもありました。
（福島市５０代女性）

木に、森に、自然に感謝する。ツリークライミングの体験を通してこの３つができた気がします。木に対する考え方が変わりました。
（福島市２０代男性）

常葉町（田村市）の素晴らしさを初めて知りました。地域の魅力を自分たちが楽しみ、生物多様性を再生しようとする姿は、多くの地域のお手本になると思いました。
（福島市４０代女性）

山と森への愛が溢れていて、私も阿武隈の山が大好きになりました。
（東京都４０代女性）

人が自然の恵みに感謝し、手入れをして初めて里山が長く息づいていく。共生ってそういうことなのかと。山の頂に見える風車を見て、本当に美しいと思いました。
（郡山市４０代女性）

# 郡山市 仁井田本家

## 地域にかける想い

蔵の創業は江戸時代。50年前から、無農薬で米を作り始め、ちょうど300年目に全ての酒を自然米で醸造、という体制を整えた矢先に、東日本大震災が起きました。

蔵に甚大な被害はなかったものの、福島で安全な酒ができるのか、といった風評被害がありました。しかし私たちは「創業からこれまでの300年の間には、もっと大変なこともあっただろう。ここで立ち止まらないで前へ進もう！」とここまできました。

先代が始めた無農薬で栽培した自然農法の純米酒造りを続けていくこと、そして次の世代へ豊かな環境をできるだけ多く残していくことが何よりも自分の大事な仕事だと思っています。

この場所が、山が豊かで、きれいな川が流れて、健康な田畑が広がる、自分たちが誇りに思えるような、そんな田舎になることを夢見ています。

酒蔵「仁井田本家」
十八代 蔵元杜氏
**仁井田 穏彦さん**

## 参加者の声。
*Guest's Voice*

田んぼ、米作りから自然農法にこだわった理想のお酒造りだけでなく、豊かな里山、人の生活を追い求めている姿に感動しました。それも100年後の未来を見つめていらっしゃる。仁井田さんならきっと理想を実現されることと思います。（千葉県50代女性）

300年目の節目に震災に合ったことで、後300年続く酒蔵を作る決意をされた、蔵元のお話はお酒と同じくらい重くて強かった。「300年後の蔵元に『あの時のあいつが頑張った』と言われたい」という言葉に思わず感動の涙が出ました。（東京都40代女性）

ピンチをチャンスに変えて、自然酒造りにこだわり、スイーツづくりをするなどの企業努力が素晴らしいと思いました。（福島市50代女性）

稲作が始まった弥生時代にも酒造りはしていたはずです。その自然状態に立ち戻り、現在の技法を駆使して「本来の日本酒」を醸造する志に感銘を受けました。（東京都80代男性）

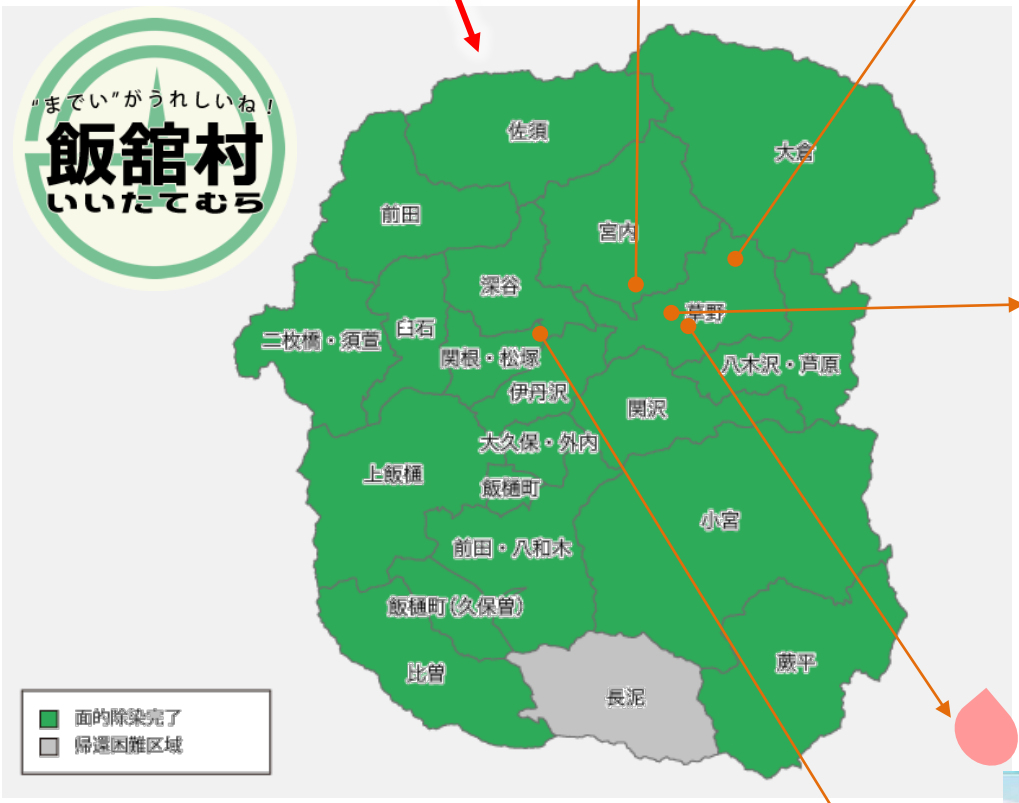
日帰り

# 日本で最も美しい村「飯舘」を訪ねる

- 実施日：平成29年11月18日（土）
- 参加者：29名
- ナビゲーター：越智 小枝さん
  佐藤 健太さん（飯舘村議会議員）

いいたて村の道の駅「までい館」

菅野元一さん、クニさん




交流センター「ふれ愛館」

株式会社　菊池製作所
福島営業所、福島工場

迎えてくれた菅野元一さんの「悩んだら森に入れ！」。
飯舘村は、悩まなくてもまた行きたくなる温かいところです。
越智 小枝

山田 猛史 さん

# 飯舘村
## 菅野元一さん
## 菅野クニさん

## 地域にかける想い

2011年3月で農業高校の教員を定年退職するお父さん（元一さん）と飯舘村で菅野農園を営むのが夢でした。

お父さんが育てたジャガイモ（イータテベイク）の種芋と村の山に自生しているナツハゼを使って、飯舘村の特産品にする計画でした。

しかし、まさにその年に震災が起こり、飯舘村は計画的避難区域になりました。

それでも私は夢をあきらめませんでした。福島市で避難生活を送りながら、農業を続ける決意をしました。

飯舘村に帰れないと思ったことはありません。帰れるという前提で、帰ったら何をするかという思いで動いてきました。

**菅野 元一さん**
**クニさん**

## 参加者の声。
*Guest's Voice*

土地を愛し、土地に根差して、土地と共に生きる生活の素晴らしさを教えていただきました。（福島市60代女性）

クニさんの熱量がとにかくすごい！前を向いている人の姿は他人を変えられると思いました。（田村市50代男性）

過去は過去として、前向きな姿、誰にでも公平に接し、言うべきことは言う。未知のこれからもしっかり見据えた生き方が素晴らしいです。（福島市60代男性）

これからというタイミングでの原発事故。その様な中でも、大切にしている想いを見失うことなく、一つ一つ進めていくバイタリティに尊敬！子どもたちが帰ってきたくなる家にしたいという気持ちに感動！（埼玉県30代男性）

生きがいと地域のつながり。これが大切。自分が地域で生きがいを感じることが、人々を地域につなぎ留めるということを実感しました。（東京都50代男性）

# 飯舘村
# 菊池製作所

## 地域にかける想い

本社は東京都八王子市。社長の出身地・飯舘村に福島工場があります。

原発事故の影響で、飯舘村は「計画的避難区域」に指定されましたが、震災から1日も稼働を止めず操業を続けてきました。

現在、ロボット事業を本格化させ、介護用の筋力補助装置「マッスルスーツ」の製造・販売、ロボット関連企業として、その主要部品の製造をしています。

やはり福島の人が地元に残る環境づくりが重要です。事故の影響で震災前には約290人いた従業員が一時は100人程度退職しましたが、現在は、震災前の状況に戻ってきています。

菊池製作所
**森岡 賢治さん**

## 参加者の声。
*Guest's Voice*

日本の最先端技術が、飯舘村に存在したことが素晴らしい。社長が自分の故郷を思う心。震災があったにも関わらず会社を守ってきた社員の皆さんなど。飯舘村には村を大事にする人がたくさんいることがわかりました。素敵な村ですね。（福島市50代女性）

原発事故後も飯舘村に残り、事業活動を維持し、企業としても成長を成長されてきた。社員の皆さまの努力に感動しました。（福島市40代男性）

高齢化社会を想定された製品は、これからの恩恵をもたらしていただけるでしょう。避難されずイノベーションを進められた製作所の社風は生き方にも継がれています。（福島市60代女性）

身近なところで世界的な製品が作られていることを知らなかった。これからも期待したい。（福島市60代女性）

# 飯舘村
# 山田猛史さん

写真：広報いいたて平成29年7月号より転用

**山田 猛史さん**

## 地域にかける想い

原発事故前は、米とタバコ、ブロッコリー栽培、和牛の繁殖を自宅で手掛けていました。避難により農家の大半の方は身を切られる思いで牛を手放し村を離れました。

そんな中でも、畜産への愛着を持ち続け、避難先の中島村で牛舎を借りて、飯舘から連れてきた3頭をもとに畜産を再開。平成26年秋には福島市飯野町に牛舎を買って移り、36頭の牛たちを飼っていました。

現在、飯舘村に戻ってできるだけ広い面積となるよう約60ヘクタールの水田を活用して牧草を作っています。

挑戦もしないであきらめたくない。息子と一緒に、いつかは全国の産地と競えるような高品質の牛を飯舘で育てたい、息子の世代にいい環境の農地を託したい、少しでも希望をつなげたいと思っています。

## 参加者の声。
*Guest's Voice*

「15年頑張れば若い者が帰って来れるっぺ」と柔らかく受け止める山田さんのお話が印象的でした。幾つになっても年長者から学ぶものは多いですね。（東京都40代女性）

お年寄りが今できることをやって、次の世代に伝えるというお考えに感動しました。ポジティブな考えを学ばせていただきました。飯舘村は素晴らしい人がたくさんいらっしゃいますね。（福島市50代女性）

若い人に戻って来いとは言わず、戻って来れるようその土台を作りたいという頼もしさに憧れるとともに、私自身が噴気させられました。（福島市20代女性）

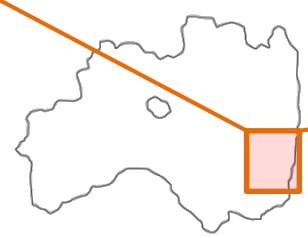
次世代のために、気力体力を振り絞り、そして明るく頑張っている姿に、元気をもらいました。（福島市40代女性）

転んでもただでは起きない。良い意味でのしたたかさが東北の人の強さかもしれません。次世代にどう繋げるかでいえば、時分の生き様をどう見せるかということなのでしょう。継いでと言わず、自然と継ぐように仕向けられるのも、自身が人生を楽しんでいるからなのでしょう。（東京都50代男性）

日帰り

# 除染後、仮置場、中間貯蔵の今を知る

- 実施日：平成29年12月4日（月）
- 参加者：21名
- ナビゲーター：開沼 博さん



福島の「いま」を見てもらいたい。
現地を視察することで
「他人事」ではなく「自分事」として
福島の復興を考える機会に
なったのではないでしょうか。

# 楢葉町 仮置場

（訪問地の）天神岬から楢葉町の仮置場が見えます。除染土壌や災害がれきが保管されており、それらは地権者の皆さまの農地をお借りしていますので、除染土壌等を、できるだけ早く中間貯蔵施設に運びいれて、できるだけ早くそれらの農地をお返したいと思っております。

中間貯蔵施設は大熊町と双葉町の区域に計画され、27年1月から用地取得交渉を始めることができました。将来にわたって故郷を失うという地元の方の苦しい思いの中、土地を提供してくださった方々に感謝しています。

土地取得と平行して土壌搬入という施設運営も始める、通常の公共事業では行われない作業順番となっています。

県全体の復興に向けて、土地をご提供くださった地権者の思いを重く受け止め、事業にあたっていきたいと思います。

環境省 福島環境再生本部長
**小沢 晴司**

## 参加者の声。
*Guest's Voice*

環境省の方から説明を聞けたことがとても良かった。森林に関する除染についても理解することができました。ただアウトプットするまでには、まだまだ理解が足りていません。いろいろ難しいと感じました。（郡山市50代女性）

以前の景色を知っているので、久しぶりに見た光景に声も出ませんでした。（郡山市40代男性）

現場でないとわからない事が多く、特に民家の横での作業を見ると、住民のお気持ちが察しられました。（郡山市60代男性）

何度かこの地域を自分で訪れていましたが、仮置場一つとっても風景として認識していただけで、地区ごとの設置など具体的な知識を持っていませんでした。そこを把握することができ。とても良い機会になりました。（東京都50代男性）

# 大熊町／双葉町 中間貯蔵施設

中間貯蔵施設に関する

## 豆知識

●福島県では、除染で取り除いた土や放射性物質に汚染された廃棄物の量が膨大となるため、現時点で最終処分の方法を明らかにすることは困難です。このため、最終処分するまでの間、安全に集中的に管理・保管するための中間貯蔵施設を福島県内に設置することとしています。

●中間貯蔵施設には、貯蔵や減容化のための施設の他、空間放射線や地下水のモニタリング（監視）、情報公開、効果的な減容化技術の研究開発・評価のための施設も併設する予定としています。

**何を？**

**①仮置場などに保管されている除染に伴い発生した土壌や廃棄物**

福島県内市町村の仮置場などに保管されている除染により取り除いた土壌や側溝の汚泥、草木、落ち葉等を貯蔵

**②1kgあたり10万ベクレルを超える放射性セシウム濃度の焼却灰など**

可燃物は原則として焼却し量を減らした上で焼却灰として貯蔵

**どれだけ？**

福島県内の除染土壌などの発生量は、減容化（焼却）した後で**約1,600万㎥～2,200万㎥**＊と推計

＊約1,600万㎥～2,200万㎥は、東京ドーム（約124万㎥）の約13～18倍に相当

## 参加者の声。

*Guest's Voice*

なかなか知ることが出来ない中間貯蔵施設について、どのように進めてきて、今どうなっていて、今後どうしていこうとしているのか。県外避難者支援をしている方々にも伝えていきたいと思います。（福島市４０代女性）

中間貯蔵施設での実際の分別や減容化の説明を聞くことができて良かったが、広大な予定地がすべて使用され、また県外へ運び出すまでの工程はなかなかイメージすることが難しいと感じました。（神奈川県４０代女性）

広大な中間貯蔵施設エリアに膨大な量の土壌等を運び込み、２８年３ヶ月後までには県外に搬出するという壮大な事業への一端を目の当たりにし、絶対に県外搬出を成し遂げるぞという強い思いに駆られました。（福島市６０代男性）

とにかく大規模で驚きました。理論的で、合理的に考えられている様でとても興味深かったが、量が量なので、何か考え直すべき点もあるのではないかと思いました。（喜多方市４０代男性）

# 広野町／楢葉町
## Jヴィレッジ

Jヴィレッジは、1997年に日本初のサッカー・ナショナルトレーニングセンターとしてオープンしました。「日本のサッカーの聖地」と称され、数多くの大会や合宿などに利用されスポーツ振興・地域活性化の拠点として歩んできました。

東日本大震災と、それに伴う原発事故の影響により営業は全面休止となり、原発事故の対応拠点として、グラウンドは駐車場に使われてきました。

2020年の東京オリンピックに向け、2018年の夏までにスタジアムや屋内練習場も一部整備し、2019年4月には全面再開を目指しています。

スポーツの力で再び多くの人々が集い、交流する拠点となり、福島復興のシンボルとなるよう尽力していきます。

株式会社Jヴィレッジ
**猪狩 安博さん**

### 参加者の声。
*Guest's Voice*

廃炉の最前線基地だったJヴィレッジは、その役割を未来を見据えた青少年のサッカーナショナルトレーニングの場所に舵を取り直し、全面工事中でした。サッカーボールが飛び交い歓声のあがるJヴィレッジを早く見たい思う気持ちとともに、この6年半、この場所が担って来た役割を思い返した時間でした。（神奈川県60代男性）

この6年半でサッカークラブは他のトレーニング場を見つけてしまっているという話が印象に残りました。（東京都60代男性）

Jヴィレッジの再オープンへの希望と経営的な成功に向けての大変さ。しっかりと応援していこうと再認識しました。（福島市60代男性）

# 楢葉町
# 楢葉遠隔技術開発センター

楢葉遠隔技術開発センターは、福島第一原子力発電所の廃炉に向けた研究開発の拠点施設として、日本原子力開発機構が楢葉町に整備した施設です。

原発内の様子を仮想空間で再現。廃炉作業の効率的な方法や実際の作業の流れを現実空間で再現しながら試験を重ねています。

例えば、炉内に投入するロボットや機材をVR空間でシミュレーションし、同時に積み木や配管などで凸凹を再現し、実験を行います。

施設は民間などが利用できるようにもしていて、地元企業や自治体が利用することでイノベーションを生み、新たな雇用などへと繋がることが期待されています。また、国際共同研究や海外の人材の受け入れ、地域との共生なども視野に入れています。

楢葉遠隔技術開発センター
試験棟

## 参加者の声。
*Guest's Voice*

多くの方々に見ていただきたい施設だと思いました。この施設の有効な活用により、廃炉の完了を強く望みます。
（福島市６０代男性）

廃炉に向けて必要な施設であり、そこで何が行われているか知ることはとても重要だと思いました。
（福島市４０代女性）

廃炉技術開発の必要性は、今後大いに期待されていくと思います。若い世代の人たちが、職業として魅力を感じることもあるのではないでしょうか。
（東京都５０代男性）

ＶＲなど先進技術を駆使する場所としても一つのみたい未来があると感じた場所です。
（東京都３０代男性）

note